

乳幼児の家庭事故の実態に関する研究 (分担研究；小児の障害につながる傷病に関する研究)

齋藤 歎 能

要約：乳幼児死亡は年を追って改善されているが、その中で不慮の事故に関する死亡は、ほとんど改善されていない。病気による死亡が減少したために、全死因の中で占める事故死の割合がむしろ増加している。乳幼児の事故防止をはかるためには、単に死亡事故についての原因を追求するだけでなく、死に至らない事故災害について、その原因や傷害の性状などを検討することは極めて重要である。本年度は、これらの視点から母親の実態調査を実施したので、その結果について報告をする。

見出し語：家庭事故，交通事故，安全教育，安全指導，安全管理

研究方法：調査対象は東京都7園，神奈川県2園，茨城県2園（合計11園）の保育園・幼稚園の園児の母親に対して健康及び安全に関するアンケート調査を実施した。回収したアンケート調査用紙は東京都689名，神奈川県712名，茨城県499名，計1900名である。

調査内容は、○現在までの傷害経験の有無，○事故発生の時間帯，○傷害の部位，○事故発生状況，○傷害の種類，○傷害による入院日数および通院日数，○事故発生場所，○交通事故経験の有無，○信号による道路横断の能力，○子どもの運動能力，○子どもの遊び場所，○家庭での遊び友達の有無，○子どものテレビ視聴時間，○親子一

緒の遊びなどの質問項目を設定し，回答を求めた。

結果：事故経験の有無では，調査対象児1900名中800名（42.1%）が医師の治療を要した事故を経験しており，事故の発生時間帯は昼（45.6%），夕方（26.0%）であり，この両方で71.6の値となっている。

子どもの生活の場を見ると幼・保育園と家庭に大別できるが，幼・保育園での事故は11.7%，家庭での事故は88.3%で家庭での事故がかなり多い。特に，家庭事故の発生場所は居間24.6%，道路12.8%，庭6.0%の順位であり，そのほか公園，台所，食堂，階段，空地などとなっている。

事故発生状況では，転倒27.6%，接触20.5%，

転落19.9%の順位であり、この3者で68.0%を占めている。この他に衝突、はさむ、落下物、交通事故、飛来物に多くの事故が見られる。

傷害の部位をみると、顔部24.9%、頭部17.4%と多く、つづいて脚部、背部、手指部、上腕部の順になっている。傷害の種類では、切傷42.1%、火傷17.6、打撲11.6、骨折9.9%で約10%以上の値を示している。

病院や医院に通院し、治療を受けた日数調査では6～10日39.1%、1～5日32.5%であり、この両者で71.6%と大部分を占めている。

乳幼児の事故の特徴を大きく分けると、園や家庭の中で起きる生活事故と交通の中で発生する交通事故がある。交通事故の実態についての結果をみると、登降園途中0.2%（4件）、家庭周辺1.8%（34件）であり、事故経験者の4.8%である。信号による横断についての能力は、完全にできる59.6%であり、交通に関する基本的事項はかなりできている。

子どもの運動能力は事故との関わりがあるため調査実施したが、ブランコに一人乗りができる87.2%、5m位の片足けんけんができる70.4%、補助付き自転車に乗ることができる82.7%であり、大部分の子どもは生活行動として自律できる運動能力を持っている。

日常の遊び場所の調査では、ほとんど家の外10.8%、家の外23.7%、半々45.9%であり外遊びをする児童が多いことがわかった。また、家庭内での遊びで、大きな位置を占めるテレビの視聴時間を見ると、1時間21.4%、2時間45.8%、3時間24.1%であり、この3者で91.3%であり、子どものテレビ視聴時間は3時間以内であることがわか

った。また、家の中で子どもの遊び相手となる割合は、よくする14.9%、時々する76.2%であり、両者で91.1%となっている。さらに、家の外で子どもの遊び相手になる割合は、よくする7.5%、時々する64.6%であり比較的遊び相手になっていることがわかった。

考察：乳幼児期における事故経験者はかなり多く、一步誤ると生命にも関わるものであり、子どもの指導と管理による安全対策が必要である。

家庭内の事故では、潜在危険が多い場所で多発しており、危険箇所の安全点検と環境整備の徹底によって、多くの事故は防止できるようである。また、子どもの事故は身体的に活動する時間帯や疲労する時間帯に多く、これらの時間帯における活動や行動のとり方の安全指導を子どもの発達段階であった方法で適切に行うようにする。

事故発生状況や傷害の部位をみると、成人と異った傾向がみられる。事故の発生状況では、転倒、接触、転落が多く、また、傷害の部位では顔部、頭部に多発している。これは形態的に成人と比較し未発達状態にあり、転倒や転落がしやすい傾向がみられる。また、転倒や転落の際に危険を回避するための行動や受け身を成人のようにできず頭部や顔部を直接打ち傷害に結びついている。これらは、この時期の発育発達と事故の大きな特徴であり、これらを踏まえた安全指導が重要となる。

交通事故に関する調査結果、事故経験者中38名であったが、軽傷であったことは不幸中の幸であり、今後ますます交通安全教育の徹底が望まれる。

子どもの運動能力の調査では、大部分の子どもは日常生活を自律できる能力を持っており、事故に対する安全指導の徹底が今後望まれることがわかった。

表1 事故が発生した場所

園内	35	4.4%	子ども部屋	13	1.6%
園庭	44	5.5%	廊下	5	0.6%
園外保育	4	0.5%	階段	24	3.0%
登降園中	5	0.6%	その他	33	4.1%
その他	6	0.7%	公園	43	5.4%
台所	39	4.9%	空き地	20	2.5%
食堂	34	4.3%	道路	102	12.8%
ベランダ	11	1.4%	共同階段	14	1.7%
風呂場	13	1.6%	無記入	7	0.9%
玄関	16	2.0%	その他	87	10.9%
居間	197	24.6%	合計	800	100.0%
庭	48	6.0%			

表2 事故発生の状況

転倒	221	27.6%	交通事故	10	1.3%
接触	164	20.5%	飛来物	5	0.6%
転落	159	19.9%	誤飲	1	0.1%
衝突	88	11.0%	その他	58	7.2%
はさむ	67	8.4%	無記入	12	1.5%
落下物	15	1.9%	合計	800	100.0%

表3 傷害の部位

顔	199	24.9%	胸	12	1.5%
頭	139	17.4%	腹	10	1.2%
足	103	12.9%	腰	5	0.6%
腕	94	11.8%	背	0	0.0%
手の指	86	10.7%	その他	43	5.4%
手	49	6.1%	無記入	7	0.9%
大腿部	30	3.7%	合計	800	100.0%
足の指	23	2.9%			

表4 傷害の種類

切りきず	337	42.1%	さしきず	13	1.6%
やけど	141	17.6%	でき水	0	0.0%
打撲	93	11.6%	窒息	0	0.0%
骨折	79	9.9%	その他	50	6.3%
すりきず	34	4.3%	無記入	7	0.9%
脱臼	33	4.1%	合計	800	100.0%
捻挫	13	1.6%			

表5 傷害による治療日数

0	1~5	6~10	11~15	16~20	21以上	合計
45	260	313	65	33	84	800
5.7%	32.5%	39.1%	8.1%	4.1%	10.5%	100.0%

表6 傷害による入院日数

0	1~	11~	21~	31以上	合計
768	23	5	3	1	800
96.0%	2.9%	0.6%	0.4%	0.1%	100.0%

表7 交通事故経験の有無

ない	登降園の途中	その他	無記入	合計
760	4	34	2	800
95.0%	0.5%	4.3%	0.2%	100.0%

表8 信号による道路横断の能力

完全なる 出来ない	1133	59.6%	全く 出来ない	63	3.3%
もう一歩	392	20.6%	わ か ら い	104	5.5%
半々	133	7.0%	無記入	6	0.3%
殆ど 出来ない	69	3.6%	合計	1900	100.0%



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約：乳幼児死亡は年を追って改善されているが、その中で不慮の事故に関する死亡は、ほとんど改善されていない。病気による死亡が減少したために、全死因の中で占める事故死の割合がむしろ増加している。乳幼児の事故防止をはかるためには、単に死亡事故についての原因を追求するだけでなく、死に至らない事故災害について、その原因や傷害の性状にどを検討することは極めて重要である。本年度は、これらの視点から母親の実態調査を実施したので、その結果について報告をする。